

## 一闍提 (icchantika) は誰か<sup>(1)</sup>

辛 嶋 静 志

### (1) *icchati* 「主張する、認める」

パーリの『清浄道論』<sup>(2)</sup> *Visuddhimagga*には、「主張する」あるいは「認める、承認する、認可する」<sup>(3)</sup>の意味で使われた*icchati*の例が数回出る。

310.20f. *akkharacintakā pana atthaṃ avicāretvā "nāmamattam etan" ti icchanti, ye pi atthaṃ vicārenti, te sattāyogena (v.l. satta°) "sattā" ti icchanti* (次に文典家は [有情の語] 義を考察せずして、この [有情の語] は名のみなりと主張す。義を考察する [数論家等の] 人々も純質と相応するが故に有情なりと主張す。)<sup>(5)</sup>

338.30f. *ārammaṇātikkamato catasso pi bhavant' imā / aṅgātikkamam etāsaṃ na icchanti vibhāvino* // (斯くすべて所縁を超ゆるが故に、此等無色定は四となると知るべし。次に賢者は此等 [無色定] に支の超越を認めず。)<sup>(6)</sup>

375.20f. *aṅgārammaṇavavathāpanam pi eke icchanti, aṭṭhakathāsu pana anāgatattā addhā taṃ bhāvanāmukhaṃ na hoti* (或る人々は「支と所縁との確立」もありと主張す。されど諸義疏に述べられ居らざるが故に、確かに斯る修習門は無し)<sup>(7)</sup>

692.27f. *ye pana nānābhisamayam icchanti tesam uttaram Abhidhamme Kathāvatthus-mim vuttam eva* (次に種々の現観ありと主張する人々に対しては、更に阿毘達磨の論事に於て説かれ居れり。)<sup>(8)</sup>

同じ用法の*icchati*の例は、*Kathāvatthupparāṇa-aṭṭhakathā*にも頻出する。例えば、<sup>(9)</sup>

37.2f. *Sammitiyā Vajjiputtakā Sabbatthivādino ekacce ca Mahāsaṅghikā a; ahato pi (v.l.-) parihānim icchanti* (正量部・犢子部・説一切有部、そして一部の大衆部の者たちは、阿羅漢の退転を主張する。)

41.5f. *tattha ye paranimmitavasavattideve upādāya tad upari devesu maggabhāvanam pi na icchanti seyyathāpi Sammitiyā* (これに関し、例えば正量部は、他化自在天以上の天界での道の修習を認めない。)

85.15f. *tattha ye sabbasmim pi anāgate nāṇaṃ icchanti, seyyathāpi Andhakā* (これに関し、例えば案達羅派は、未来全体に関する知を主張する。) などなど。

パーリ文献と同じく「主張する」という意味で使われた√*iṣ*の用例は、龍樹の『中論』にも五回見られる。

II 10d. *gantur gamanam icchatah* // (去る主体に〔さらに〕去るはたらき〔がある〕、と主張しているからである。)<sup>(10)</sup>

VI 8cd. *sahabhāvaprasiddhyartham prthaktvaṃ bhūya icchasi* // (ところが、〔両者の〕結合を成立させるために、汝はさらに、〔両者が〕別異であることを主張している)。<sup>(11)</sup>

VI 9cd. *katamasmin prthagbhāve sahabhāvaṃ satīcchasi* // (〔両者が〕互いに別異であるということが存在するときに、汝は、そのどちらにおいて結合を主張するのであるか。)<sup>(12)</sup>

XII 1. *svayaṃ kṛtaṃ parakṛtaṃ dvābhyāṃ kṛtaṃ ahetukaṃ / duḥkham ity eka icchanti tac ca kāryaṃ na yujyate* // (苦は、自身によってつくられたもの〔自作〕、他によってつくられたもの〔他作〕、両者によってつくられたもの〔共作〕、無因のもの〔無因作〕である、と或る人々は主張する。しかるに、それ〔苦〕が結果であるというのは、正しくない。)<sup>(13)</sup>

同じく「主張する」あるいは「認める、承認する、認可する」(多く否定形。即ち「認めない」という意味の√*iṣ*は『俱舍論』(Abhidharmakośabhāṣyam)<sup>(14)</sup>に類出する。例えば、<sup>(15)</sup>

- p. 72, l. 8. *caturthadhyānabhūmikām api nirodhasamāpattim nikāyāntariyā icchanti*  
 (別の部派の人々は、第四靜慮地に属する滅尽定 [があること] を主張す  
<sup>(16)</sup>  
 る。)
- p. 72, l. 17 = 2nd edition, p. 72, l. 20. *atīstasyāpy astivāt isyate Vaibhāṣikāḥ samanant-  
 arapratyayatvam* (毘婆沙師たちは、「過去 [の心] があるから [それが再  
 び生ずる心の] 等無間縁になる」と主張する。<sup>(17)</sup>)
- p. 85, l. 13 = 2nd edition, p. 85, l. 15. *ye tu rūpaṃ rūpasya nēcchanti sabhāgahetuṃ  
 teṣāṃ eṣa granthaḥ icchā-vighātāya sampravarttate "atītāni mahābhūtāny  
 anāgatānām mahābhūtānām hetur adhipatir" iti* (しかし、色が色の同類因で  
 あると認めない人々にとっては、次に挙げる論の本文は、その主張を否定  
 するものである。「過去の大種は未来の大種の因であり、増上 [縁] であ  
 る」と。<sup>(18)</sup>)
- p. 189, l. 4. *atra tu kecit tīrthaṅkarā icchanti* : "*paramāṇavo nityāste tadānīm śiṣyant-  
 a*" iti (これに関して、ある外道たちは「極微は常住であり、その [器世  
 間崩壊の] 時、残る」と主張する。)
- p. 212, l. 23. *tad etat kasyacid apy ahorātrād ūrdhvam adeśanān nēcchanti Vaibhāṣik-  
 āḥ* (毘婆沙師たちは、一昼夜を過ぎては誰についても [律儀が生ずること  
 が] 説かれていないから、そのことを認めない<sup>(19)</sup>)
- p. 216, l. 8. *vināpi hi saṃvareṇōpāsakaḥ prajñaptito na tu bhikṣuśrāmaṇerāv iti te tv  
 etan nēcchanti Kāśmīrāḥ* (けれども「実に優婆塞は律儀を欠いても [優婆  
 塞として大師によって] 建立せられた。けれども比丘と沙弥とはそうでは  
 ない」というこのことを、彼等カシュミールの者たちは認めない。<sup>(20)</sup>)
- p. 223, l. 6f. *dhanarṇavat tu Kāśmīrair āpannasyēsyate dvayam //39// Kāśmīrās tu kh-  
 alu Vaibhāṣikāḥ evam icchanti* : "*na maulīm adhyāpattim āpannasyāsti bhikṣusa-  
 mvaratyāgaḥ. kim kāraṇam? na hy ekadeśakṣobhāt kṛtsna saṃvratyāgo yukta*"  
*iti ...* (「……。他方、カシュミールの者たちは、[罪を] 犯した者に財産と  
 負債との様な二つがある、と主張する。」 [三九偈]。他方、カシュミール

の毘婆沙師たちは、次のように主張する。「根本〔四重〕の罪を犯しても比丘律儀を捨てることはない。何故か。一部分を乱したからといって、全体の律儀を捨てることは道理に合わないからである」と。<sup>(21)</sup>

p. 229, l. -1. *apare punaḥ pañcavidhaṃ karmēcchanti* ..... p. 230, l. 4. *tad evaṃ nēcchanti Vaibhāṣikāḥ* (ところが他の人々は業は五種であると主張する。……毘婆沙師たちはそれをそのようには認めない。<sup>(22)</sup>)

p. 248, l. 10. *ye tarhi Dārṣāntikā abhidhyādīn eva manaskarmēcchanti teṣāṃ te kathamaṃ karmapathāḥ* (その場合、貪欲などは意業に他ならないと主張する譬喩師たちにとって、それら〔貪欲など〕はどうして業道なのか。<sup>(23)</sup>)

p. 284, l. 8 = 2nd edition, p. 284, l. 9. *tad etan nēcchanti Vaibhāṣikāḥ* (毘婆沙師たちはこのことを認めない。)

p. 407, l. 1. *evaṃ* (← *eva*) *tu nēcchanti Vaibhāṣikāḥ* (しかし毘婆沙師たちはそのようには認めない。<sup>(24)</sup>)

p. 440, l. 14. *yathēcchanti nikāyāntariyāḥ dharmāntaram eva caitasikaṃ prītiḥ. saumanasyaṃ tu triṣv api dhyānesu sukham iti* (「喜は〔喜受とは〕別な心所法である。しかるに喜受とは、三静慮における楽である」と他の部派の人々が主張するよう<sup>(25)</sup>に。)

p. 461, l. 11 = 2nd edition, p. 461, l. 14. *yat tarhi Vātsīputriyāḥ pudgalaṃ santam icchanti vicāryaṃ tāvad etat* (これに関して、犢子部は人格主体の存在していることを主張するが、まずこのことを検討すべきだ。<sup>(26)</sup>)

また、Kamalaśīlaの*Bhāvanākrama*初篇に引く*Hastikakṣyasūtra*【象腋経】の文には「主張する」「思い込む」という意味の*icchatī*の用例が見える。

*na kaścil labhyate bhāvo yasyōtpādasya sambhavaḥ /*

*asambhaveṣu dharmeṣu bālaḥ sambhavam icchatī //*

(発生生起の存在は全くありえない。生起のない事象に、愚者たちは生起を主張する)あるいは(……生起〔があると〕思い込んでいる)<sup>(27)</sup>

これらの用例から、√*iṣ*が、パーリや仏教梵語文献では、特に部派やグルー

ブ特有の考えや教理に関わる時に、「主張する：思い込む」あるいは多く否定辞とともに「認めない」の意味で用いられることが分かる。なお、『俱舍論』の漢訳者たちは、この語を「許」「説」「言」「執」「信」「信受」などと概ね正しく訳しているが、チベット語訳の訳者は、一様に '*dod pa* (「欲する」「～したい」)<sup>(28)</sup> で訳している。これは、文脈に関係なく、√*iṣ* (普通「欲する」の意味) を自動的に '*dod pa* で訳したためと考えられる。'*dod pa* が「主張する、認める」の意味で使われた例は少なくないが<sup>(29)</sup>、この意味はチベット語本来のものではなく、上記の様な「主張する、認める」の意味の√*iṣ*の翻訳語として使われているうちに派生した意味と考えられる。<sup>(31)</sup>

## (2) *icchantika* 「主張する連中」

ところで、大乘『涅槃経』、『楞伽経』、『宝性論』などに出る *icchantika* (一闍提 MC. *ʔjet tshjān: diei*) の語源・語義に関して、これまで色々と論考がなされている。語源に関しては、現在分詞の強語幹 *icchant-* に *-ika* 語尾が着いたものと Edgerton<sup>(32)</sup> は考えたが、これも問題が無いわけではない。

一方、語義に関しては、「イッチャンティカの語義は、貪欲な人、利養をむさぼり、世間に執着する人の意味である。これに『断善根』の意味が附加されたのである。<sup>(33)</sup>」「……字義どおりには、〈欲求する人〉という意味に解され、現世の欲望を追求する人びとをさすが、仏典の用例では、因果・業報・来世を信ぜず、仏の所説にしたがわず、正法を誹謗して成仏の縁を欠くものをいう。<sup>(34)</sup>」「……もとの意味は、〈欲求しつつある人〉であるが、断善根、信不具足、極欲などと訳して成仏する因をもたないものをいう。<sup>(35)</sup>」「…… 通俗語源解釈によると、欲求しつつある人 (S. *icchan*) の意で、インドの快樂主義者や現世主義者をさすというが、仏教では仏教の正しい法を信ぜず、さとりを求める心がなく、成仏の素質・縁を欠く者をいう。世俗的快樂だけを希求している人。また仏教の教義を毀謗し、救われる望みのない人。<sup>(36)</sup>」などと説明される。しかし、これら辞書などの説明には問題がある。まず、*icchantika* と

いう語は、大乘『涅槃經』、『楞伽經』、『宝性論』など比較的成立の遅い如来藏系大乘仏典と *Mahāvīyūtpatti* にしか現れないこと。またその *Mahāvīyūtpatti* を除けば、全ての例が「一闍提」の意味であり、従って「インドの快樂主義者や現世主義者」「現世の欲望を追求する人びと」を意味する用例はどこにも存在しないことである。

先行する研究を踏まえ、大乘『涅槃經』など仏典における一闍提の用例を幅広く検討し、その語義を詳しく論究した望月良晃博士は、「一闍提とは名聞・利養を貪求する者」であり、「大乘涅槃經徒の身近かにいる他の菩薩乗の者」と結論付けている。<sup>(37)</sup> この望月博士の「一闍提とは名聞・利養を貪求する者」という定義は、最近の研究でも継承されている。<sup>(38)</sup>

ところが、望月博士が網羅的に列挙された大乘『涅槃經』やその他の文献に見える一闍提の用例を見る限り、<sup>(39)</sup> 「慢心（名声）に支配されている」という表現はあるが、<sup>(40)</sup> 一闍提がはっきりと「利養」を求めていると表現されている例はない。むしろ大乘『涅槃經』のチベット語訳に拠れば、一闍提（*'dod chen pa*）の *'dod pa*（「求めている」というより「主張している」）する対象は「阿羅漢である」ことである。すなわち、一闍提（*'dod chen pa; icchantika*）は「阿羅漢である」と主張している（*'dod pa; icchati*）のである。その経文には次のようにある。

<sup>(41)</sup>（自ら）阿羅漢であると主張する（*dgra bcom pa yin par 'dod pa*）盲目で孤独の一闍提（*'dod chen pa*）は、無限の道を歩もうと願っている（*'dod do*）。慈心を備えた阿羅漢であると主張して（*dgra bcom pa yin par 'dod la*）、方広（*vaipulya*）を誹謗しようとする（*'dod de*）。阿羅漢であると主張しつつ（*dgra bcom pa yin par 'dod cing*）<sup>(42)</sup> 声聞乗を批判して、「私は菩薩であり、方広を説く者だ。一切衆生には如来藏の功德があり、仏が存在する」と言いつつ仏になる記別を授け、「私もあなたも様々な煩惱を水瓶のように砕こう。疑うことなく菩提を修習しよう。経の教誡はこういうものだ」と言う。王の純粹で忠実で、雄弁でとても威厳ある使者

が、敵の中で自分の命を賭けて王の言葉を全て述べる様に、智慧があり方広を堅持している者は、愚か者たちの中で自分の命を賭けて、一切衆生には如来蔵があるのだから仏になる記別を授けるべきである。

幼稚で愚かな阿蘭若住者 (*āranyaka*) にして経の誹謗者が、(自ら) 阿羅漢であると主張する (*dgra bcom pa yin par 'dod pa*) ならば、彼は阿羅漢に似ているし、摩訶薩にも似ている。その悪比丘である一闍提 (*'dod chen pa*) は阿蘭若に住んで、自分こそ (真の) 阿羅漢と同じと思ひこませる。阿蘭若住の比丘たちが、他の人たちに招待される (*bos pa*) のに堪えられず、「(次の) 四点からして、方広 (經典) は悪魔が説いたものだ。『(1) 世尊は無常である。(2, 3) 法と僧もなくなるであろう。(4) 正法がなくなるであろうというような諸々の兆しも現れている』と大乘 (經) にははっきり説かれている」と言う。

また、一闍提の本質は、經典の誹謗であるとも言われる。

「一闍提」というのは不善の衆生が慢心に支配されたものだ。その一闍提には (善が) やって来ない。(一闍提の) 本質 (*mūlāṅga*)<sup>(43)</sup> は何かと言えば、經典を誹謗することだ。<sup>(44)</sup>

従って、大乘『涅槃經』によれば、一闍提 (*'dod chen pa; icchantika*) とは、自ら「阿羅漢である」と主張しつつ (*'dod pa; icchanti*)、「方広」の教え、実際には大乘『涅槃經』を正法として認めず、誹謗する出家者なのである。上に引く「(阿羅漢に似ているし、) 摩訶薩にも似ている」<sup>(45)</sup> という表現や「『世尊は無常である。法と僧もなくなるであろう。正法がなくなるであろうというような諸々の兆しも現れている』と大乘 (經) にははっきり説かれている」<sup>(46)</sup> という記述から見て、新興『涅槃經』の「如来常住説」を認めない、旧来の大乘を奉じる出家者であった可能性が高い。<sup>(47)</sup>

*icchantika* は、 $\sqrt{is}$ の現在分詞の強語幹 *icchant-* に *-ika* 語尾がついたものか、あるいは *icchā+anta* に由来すると考えられる。<sup>(48)</sup> 上述のように、*icchant-* (*'dod pa*) には「欲する」と「主張する」の二つの意味があり、*icchā* にも「欲」と「主

張」(上に引いた『俱舍論』からの引用第三例参照)の意味があるが、この場合は「主張する」「主張」の意味と考えられる。本人が阿羅漢(すなわち権威者)<sup>(50)</sup>であると主張し(*icchati*)、周りの者からも「阿羅漢様」「摩訶薩様」と崇められる様な権威ある出家者たちが、「如来常住説は正法としては認められない」(*nēcchanti*)と判断を下せば、新興の自称「方広」教典(おそらく大乘『涅槃經』の古層部分)<sup>(51)</sup>は非仏説の烙印をおされる。これが「誹謗」なのである。名のない、一介の僧が非難をしても、その声は誰にも届かない。仏教界で権威ある大物から否定されることで、如来常住・如来蔵説という新しい説を造り出した人々は危機を感じたであろう。そして、その権威者を彼らが大乘『涅槃經』に新しく加えた部分(第二類)の中で「傲慢」「極悪非道」「救いようのない者」と繰返し非難し、*icchantika*(「[権威者だと]主張する奴」という蔑称で呼んだと思われる)<sup>(52)</sup>。しかし、反対の視点に立てば、*icchantika*と非難された僧は、新興の大乘經典を認めようとしなない頑固な伝統教学者、いわゆる原理主義者であって、決して「悪比丘」なぞではなかったはずである。

大乘『涅槃經』の第二類に属する章を作成した者たちこそ、如来常住・如来蔵説を認めない権威者に対して*icchantika*とレッテルを貼った最初の人々と見てよいであろう。大乘『涅槃經』の影響下に現れるその後の經典や論書も、自分たちの經典こそ真の大乘の教えであるという主張から、自分たちの經典を認めない者を、“大乘”の教えの誹謗者*icchantika*と貶したようである。

しかし、時代が下がると、*icchantika*は“主張する者たち”ではなく“(輪廻を)欲する者たち”という意味で理解される様になった。それは『宝性論』<sup>(53)</sup>に端的に見られる。<sup>(54)</sup>すなわち、

- p. 28, l. 14f. *ye nāpi saṃsāram icchanti yathēcchantikā* (彼らは一闍提の様に輪廻を求めたりはしない)<sup>(55)</sup>
- p. 29, l. 1f. *tatra ye sattvā bhavābhilāsina icchantikās tanniyatipatitā ihadhārmikā ev-ōcyante mithyātvaniyatah sattvarāsir iti* (これら〔上述の衆生たち〕のうちで、輪廻生存を希望する衆生たち〔すなわち〕 イツチャンティカたち、



[および、] この仏法内のものではあるが、[イッチャンティカと同じく] そこに属することの決定的なものたちとは、〈邪定衆の衆生たち〉とよばれる。<sup>(56)</sup>

p. 31, l. 8f. *tatra mahāyānadharmapratihatānām icchantikānām aśuciṣamsārābhirati-viparyayaṇa bodhisattvānām mahāyānadharmādhimuktibhāvanāyāḥ śubhapāramitādhigamaḥ phalaṃ draṣṭavyam* (大乘法を嫌悪するイッチャンティカたちが不浄なる輪廻をよるこぶことの反対として、〈浄波羅蜜〉の体得が菩薩たちの大乘法に対する信解の修習の果であると知るべきである。<sup>(57)</sup>)

この“主張する者たち”から“(輪廻を) 欲する者たち”<sup>(58)</sup>への語義解釈の変化は、大乘『涅槃経』=如来蔵思想を非仏説と厳しく批判する現実の敵対者=一闍提が、少なくとも目の前からいなくなったことを示しているのではなからうか。如来蔵思想を奉じる者が増え、自説に自信を持つようになったか、あるいは如来蔵思想が大乗仏教思想として受け容れられて来たことを示しているのかも知れない。

(Endnotes)

- (1) 本論文は、『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』第5号(2002年)に発表した“Miscellaneous Notes on Middle Indic Words”という論文で取り扱った icchati, icchantika の語義に関する小論考 (pp. 148-151) を発展したものである。その後に発表された「一闍提」に関する日本人の論文を見ても、従来の解釈を敷衍するだけで、拙論に言及するものがなく、寂しい思いをしていた。ところが、Lambert Schmithausen 教授が論文の中で、拙論を引いて下さっているのを目にして (“Zum Problem der Gewalt im Buddhismus,” *Krieg und Gewalt in den Weltreligionen: Fakten und Hintergründe*, cd. Adel Theodor Khoury et al., Freiburg 2003: Herder-Verlag, p. 137, n. 45)、教授の学問の幅広さに改めて感心すると同時に、大いに勇気づけられ、本論文を書くに至った。その点から Schmithausen 教授に感謝の意を捧げたい。また、本論文の執筆に際し、貴重なご意見とご教示を下さった方々、とりわけ、Oskar von Hinüber・原實・五島清隆・本庄良文・三宅伸一郎・佐藤直美・Peter Skilling・米澤嘉康・佐々木大悟の諸先生および手元にない資料を送付して下さい下さった原田泰教先生にも心から感謝致します。

- (2) ed. C. A. F. Rhys Davids, PTS.
- (3) *icchati*のこの意味はパーリ語の辞書に採られていない。Margaret Cone, *A Dictionary of Pāli* (Oxford 2001) は、文法用語として“approves, allows, prescribes”の意味を採っており (*icchati*<sup>1</sup> [2])、*Paramatthajotikā II*と*Saddanīti*での用例を引いている。Cf. *Points of Controversy or Subjects of Discourse, Being a Translation of the Kathā-vatthu*, by Shwe Zan Aung and Mrs. Rhys Davids Oxford (PTS), p. xxxiv. 他方、梵語辞典では、Monier-Williams, *A Sanskrit-English Dictionary*は文法用語として“to acknowledge, maintain, regard, think”の意味を採っている (s.v.  $\sqrt{is}$ ) のみだが、さすがOtto Böhtlingk, Rudolph Roth, *Sanskrit-Wörterbuch*は、「認める；見なす」(anerkennen, ansehen für) あるいは受動態*isyate*で「認められる、見なされる」(gebilligt, anerkannt, angenommen, für etwas angesehen werden, gelten) の意味で使われる用例を文学作品からも幅広く採っている (vol. 1, p. 823右)。
- (4) = *Paṭisambhidāmagga-aṭṭhakathā I 57.20f.*
- (5) 『南伝大蔵経』第63巻「清浄道論・二」(水野弘元訳), p. 163.
- (6) *ibid.*, p. 230.
- (7) *ibid.*, p. 304.
- (8) 『南伝大蔵経』第64巻「清浄道論・三」(水野弘元訳), p. 462.
- (9) ed. N. A. Jayawicrama, London 1979 (PTS).
- (10) 三枝充憲『中論』(上)(中)(下), 東京 1984, 第三文明社(レグルス文庫158-160), (上), p. 131.
- (11) *ibid.*, p. 211.
- (12) *ibid.*, p. 213.
- (13) 同(中), p. 349.
- (14) *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*, ed. P. Pradhan, Patna 1967, revised 2nd edition, Patna 1975.
- (15) Cf. 『阿毘達磨俱舍論索引：第一部 サンスクリット語・チベット語・漢訳対照』, 大蔵出版 1973, p. 92, s.v. IS.
- (16) Cf. 櫻部建『俱舍論の研究 界・根品』法蔵館1969, p. 323.
- (17) Cf. *ibid.*, p. 324.
- (18) Cf. *ibid.*, p. 360.
- (19) Cf. 舟橋一哉『俱舍論の原典解明 業品』法蔵館, 1987, p. 160.
- (20) Cf. *ibid.*, p. 175.
- (21) Cf. *ibid.*, pp. 222-223.
- (22) Cf. *ibid.*, p. 262.
- (23) Cf. *ibid.*, p. 365.

- (24) Cf. 櫻部建・小谷信千代・本庄良文『俱舎論の原典研究 智品・定品』大蔵出版, 2004, p. 85.
- (25) Cf. *ibid.*, p. 262.
- (26) Cf. 村上真完「人格主体論(靈魂論)——俱舎論破我品訳注(一)——」『知の邂逅: 仏教と科学: 塚本啓祥教授還暦記念論文集』佼成出版社 1993, p. 272.
- (27) Giuseppe Tucci, *Minor Buddhist Texts*, Part Two, Roma 1958: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente (*Serie Orientale Roma* 9, 2), p. 200, ll. 5-6. この用例は米澤嘉廉先生にお教え頂いた。漢訳『象腋経』には「無有法可得 若生是有者 無有和合法 凡夫欲和合」(大正17巻, No. 814, 785b8f.) とある。大正17巻, No. 813, 779b21f.; 芳村修基『インド大乘仏教思想研究——カマラシーラ思想』百華苑 1974, p. 326も参照。
- (28) Cf. 『阿毘達磨俱舎論索引: 第一部』, p. 90, s.v. *icchant-*, p. 92, s.v. *IS*.
- (29) この語義・用法については、山口瑞鳳著『チベット語文語文法』春秋社 1998年, p. 293及びPaul G. Hackett, *A Tibetan Verb Lexicon: Verbs, Classes, and Syntactic Frames*, Ithaca, N.Y. 2003: Snow Lion Publications, p. 109に詳しい。Cf. Heinrich<sup>1</sup>August Jäschke, *A Tibetan-English Dictionary*, London, 1881; Reprint London <sup>2</sup>1972: Routledge & Kegan Paulや『蔵漢大辞典』, 張怡蓀主編, 北京 1985, <sup>2</sup>1993, 民族出版社および*The Rangjung Yeshe Tibetan-English Dictionary of Buddhist Culture*, CD ROM Version 3, 2003, Rangjung Yeshe Institute, s.vv. 'dod pa, 'dod don (主張), 'dod tshul (主張), 'dod lan (認可) など。
- (30) 例えば次に列挙する辞書の'dod paの項には「主張する、認める」の意味が採られていない。*Dictionnaire Tibétain-Latin-Français*, par les Missionnaires Catholiques du Tibet, Hong Kong 1899: Imprimerie de la Société des Missions Étrangères; *Tibetan-English Dictionary: With Supplement*, Stuart H. Buck, Washington 1969: Catholic University of America Press; Delhi <sup>2</sup>1997: Sri Satguru Publications (Bibliotheca Indo-Buddhica Series, No. 179); *A Tibetan-English Dictionary with Sanskrit Synonyms*, by Sarat Chandra Das, revised and edited under the orders of the Government of Bengal by Graham Sandberg and A. William Heyde, Reprint: Delhi 1970: Motilal Banarsidass; George Roerich, *Tibetsko-Russko-Angliiskii Slovar s Sanskritskimi Paralleliami*, Moskva 1983-1993: Nauka; *The New Tibetan-English Dictionary of Modern Tibetan*, ed. Melvyn C. Goldstein et al., Berkeley 2001: University of California Press.
- (31) なお、『俱舎論』のチベット語訳では、√*is*と類義の梵語*mata* (「認められた」) も'dod (pa)で訳されている (cf. 『阿毘達磨俱舎論索引: 第三部 チベット語・サンスクリット語対照』, 大蔵出版 1978, p. 133, s.v. 'dod; p.135, s.v. 'dod pa)。これは、√*is*の翻訳語としての'dod paに「主張する、認める」の意味が確立していたことを示

す。

- (32) この語が現在分詞 *icchant-* の派生語ならば、\**icchantaka* が想定される (cf. BHSD, s.v. *tiṣṭhantika*, BHSG § 22.29)。なお注目すべきは、仏教梵語を知り尽くした荻原雲来博士が、この語を大乘『涅槃經』の文脈から判断して、*ithamṭva* (「現世」) の派生語 \**ithamṭvika*, \**aitthamṭvika* (「現世主義なる」) の俗語形と考えたことである (荻原雲来著『梵漢對譯佛教辭典：翻譯名義大集』訂正改版、東京：丙午出版社 1927年；再版：山喜房佛書林 1959年、注記 p. 23)。この他、David Seyfort Ruegg, *Le Traité du Tathāgatagarbha de Bu sTon Rin Chen Grub : Traduction du De bzin gšegs pai sñ-in po gsal žin mdzes par byed pa'i rgyan*, Paris 1973: École française d'Extrême-Orient (Publications de l'École française d'Extrême-Orient, vol. 88), p. 12, n. 1; *Indo-Iranian Journal* 17(1975), p. 275; 下田正弘『藏文和訳「大乘涅槃經」』山喜房佛書林 1993年 (Bibliotheca Indologica et Buddhologica 4), p. 92; 『小川一乘仏教思想論集』第二卷「仏性思想論II」法藏館 2004, pp. 108f. も参照。なお、2006年7月にエジンバラで開かれた第13回世界サンスクリット学会で、筆者が本論考の英語版“Who were the *icchantikas*?” を発表したところ、Oskar von Hinüber 教授は、名詞 *icchāntika* (cf. BHSD, s.v.) が結合した形 \**icchāntika* が *icchantika* に変化したのではないかという見解を示された。また原實教授は、*iti + anta > \*ityanta > \*iccanta* に由来し「言われたことすなわち伝統に固執する者」を意味する可能性はないか検討するようにご教示下さったが、先生も認めておられる様に *-cc-* > *-cch-* という音変化に難点がある。ご教示下さった恩師二人に感謝の意を表したい。
- (33) 平川彰『インド仏教史』下巻、春秋社、1974年、p. 69.
- (34) 『岩波 仏教辞典』(第二版)、岩波書店 2002年、p. 49.
- (35) 『総合佛教大辞典』上、法藏館 1987, p. 59. この辞典の「一闍提」に関する説明は詳しいが、梵語に関して根拠に欠ける記述がある。
- (36) 中村元『広説佛教語大辞典』上、東京書籍 2001年、p. 74.
- (37) 望月良晃『大乘涅槃經の研究』春秋社 1988年、p. 111.
- (38) 高崎直道『宝性論』講談社 1989年、p. 256, 注(49); 下田正弘『涅槃經の研究』春秋社 1997年、p. 356-378, 英文27-29; 袴谷憲昭『*icchantika* (一闍提) の意味と *lābha-satkāra*』『仏教学セミナー』74(2001), p. 20-34.
- (39) 望月前掲書, pp. 377ff.
- (40) 「「一闍提」というのは不善の衆生が慢心に支配されたものだ。」(*'dod chen pa zhes grags pa ni dge ba med pa'i sems can nga rgyal gyi dbang du gyur pa yin te*; 『影印北京版西藏大藏經』, vol. 31, No. 788, p. 199, 133a6).
- (41) *'dod chen pa long ba gcig bu dgra bcom pa yin par 'dod pa ni lam mi zad pa chen por 'gro 'dod do // byams pa dang ldan pa'i dgra bcom pa yin par 'dod la shin du (v.l. tu) rgyas*

*pa sun dbyung bar 'dod de / dgra bcom pa yin par 'dod cing nyan thos kyi theg pa sun phyung nas nga ni byang chub sems dpa' ste / shin du (v.l. tu) rgyas pa ston pa yin no / sems can thams cad la de bzhin gshegs pa'i snying po'i yon tan rnams yod do / sangs rgyas yod do zhes zer zhing sangs rgyas su lung ston par byed de / nga dang khyed kyis nyon mongs pa'i rn- am pa chu'i bum pa bzhin du gzhom par bya'o (v.l. bya'i) / the tsom med par byang chub bs- gom par bya ste (v.l. 'o) / mdo sde'i man ngag ni de lta bu yin no zhes zer ro / dper na rgyal po'i pho nya gtsang zhing snying nye la smra mkhas shing gzi byin che ba / dgra'i nang du rang gi srog dang bsngos te rgyal po la tshig rdzogs par smra ba de bzhin du shes rab can shin du (v.l. tu) rgyas pa gces par 'dzin pa ni byis pa rnams kyi nang du rang gi srog dang bsngos nas sems can thams cad la de bzhin gshegs pa'i snying po yod pas sangs rgyas su lung ston (v.l. bston) par byed do // dgon pa pa / mdo sde spong ba / byis pa blun po dgra bcom pa yin par 'dod pa gang yin pa de la dgra bcom pa dang 'dra bar blta (v.l. lta) zhing sems can chen po dang 'dra bar lta ste / 'dod chen pa dge slong sdig can de dgon pa na gnas shing bdag nyid dgra bcom pa dang 'dra bar rtsi bar byed de / dgon pa na gnas pa'i dge slong rnams gzan gyis bos pa mi bzod la rkyen bzhi las shing du (v.l. tu) rgyas pa ni bDud kyis smras pa yin no // bcom ldan 'das ni mi rtag go / chos dang dge 'dun yang med par 'gyur ro // dam pa'i chos med par 'gyur ba'i lta de lta bu dag kyang (v.l. -) snang ngo zhes bya ba 'di theg pa chen po las legs par bshad do zhes zer te / (『影印北京版西藏大藏經』, vol. 31, No. 788, p. 199, 133b8-134a7)。これら文に関しては、望月前掲書, pp. 425-429; 下田『涅槃經の研究』, p. 372も参照。二博士が、*dgra bcom pa yin par 'dod pa*を「阿羅漢たること願う」「阿羅漢であろうと思って」と訳すのは文法的に無理。六卷本『泥洹經』の対応する部分には、「有似阿羅漢一闍提而行惡業；似一闍提阿羅漢而行慈心。『有似阿羅漢一闍提』者，是諸衆生誹謗方等。『似一闍提阿羅漢』者，毀訾聲聞，廣說方等，語衆生言，“我與汝等俱是菩薩。所以者何？一切皆有如來性故。”然彼衆生謂：“一闍提。”而言：“如來授我等決。汝亦如是。我與汝等皆當俱離無量煩惱・衆魔惡業，如壞水瓶。於此契經必成菩提，勿復生疑。譬如烈士奉王使令，至他國中，稱歎王德，寧失身命，要不移易。我等今日亦復如是，如來記說：‘一切衆生皆有佛性。’我等要當不惜身命，於凡愚中廣說此經。”是名『似一闍提聲聞』也。若阿練若愚癡無智，狀似阿羅漢，而非謗方等。愚騷凡夫謂眞阿羅漢，謂是大士。是惡比丘示現空閑阿練若處，而自處置，似眞阿羅漢，於阿練若行，永不隨順，而作異說：“起四因緣，言『方等經』皆是魔說。言『摩訶衍』者，是諸點慧正法刺刺。諸佛世尊皆當無常，而說：‘常住’。當知是爲毀滅正法・破僧之相。”作是說者名『一闍提』。”(大正12卷, No. 376, 892c9-28)とある。四十卷本『大般涅槃經』の対応箇所は、「一闍提者名爲無目，是故不見阿羅漢道。如阿羅漢不行生死險惡之道。以無目故誹謗方等，不欲修習。如阿羅漢勤修慈心。一闍提輩不修方等，亦復如是。若人說*

言：“我今不信聲聞經典。信受大乘，讀誦，解說。是故我今即是菩薩。一切衆生悉有佛性。以佛性故，衆生身中即有十力・三十二相・八十種好。我之所說不異佛說。汝今與我俱破無量諸惡・煩惱如破水瓶。以破結故，即得見於阿耨多羅三藐三菩提。”是人雖作如是演說，其心實不信：“有佛性”。爲利養故，隨文而說。如是說者名爲惡人。如是惡人不速受果，如乳成酪。譬如王使善能談論，巧於方便，奉命他國，寧喪身命終不匿王所說言教。智者亦爾，於凡夫中不惜身命，要必宣說大乘方等如來祕藏：“一切衆生皆有佛性”。善男子！有一闍提，作羅漢像，住於空處，誹謗方等大乘經典。諸凡夫人見已，皆謂：“眞阿羅漢”，“是大菩薩・摩訶薩”。是一闍提惡比丘輩住阿蘭若處，壞阿蘭若法，見他得利，心生嫉妬，作如是言：“所有方等大乘經典悉是天魔波旬所說。”亦說：“如來是無常法。毀滅正法，破壞衆僧”。復作是言：“波旬所說非善順說”。作是宣說邪惡之法。是人作惡，不即受報，如乳成酪，灰覆火上，愚輕蹈之。如是人者謂一闍提。是故當知大乘方等微妙經典必定清淨，如摩尼珠投之濁水，水即爲清。大乘經典亦復如是。」（大正12卷，No. 374, 419a4-b1）

望月博士が指摘している様に、後半は、『法華経』「勸持品」第5～11偈に類似している（望月前掲書，p. 98）。これら偈が、阿蘭若住比丘たちと、『法華経』を創り伝えていた村住比丘たちとの対立を示していることは、すでに別の論文で示した：辛嶋静志「初期大乘仏典は誰が作ったか—阿蘭若住比丘と村住比丘の対立」『佛教大学総合研究所紀要別冊・仏教と自然』2005.3, pp. 45-70. その論文では、この偈を次の様に訳した（pp. 64-65）。

阿蘭若に住んで、糞糞を着た、愚かな苦行者たちが、私たちのことをこう言うでしょう：（第5偈）

「彼らは味を貪り執着し、在家者たちに法を説く」と。（第6偈ab）

彼ら（＝阿蘭若比丘たち）は六神通を持つ者のように敬われる。（第6偈cd）

彼らは（実は）怖ろしい心をもち、邪悪で、家に心はとりこになっている。（第7偈ab）

我々を罵る者たちは、阿蘭若の隠處に入って（第7偈cd）、利益と名譽にとらわれ、私たちのことをこう（eva[m]）言うでしょう：（第8偈ab）

「実に、この比丘たちは外道だ！彼らは自分たちの詩を説く！」（第8偈cd）

利益と名譽のために、彼らは自分で經典を作って、集会の中で説く」と。（第9偈abc）

私たちを罵る者は、（第9偈d）王たち・王子たち・大臣たち・バラモンたち・居士たち、さらに他の比丘たちにも（第10偈）、私たちの悪口を言うでしょう。「彼らは外道の教義を広めている」と（第11偈ab）

私たちは偉大な聖仙たち（＝仏たち）への尊敬の念から、これら全てを耐えましょう。（第11偈cd）

- (42) 以下の部分は重要な記述だが、誰の発言・行動と見るか難解。おそらく伝承の過程で混乱があったと見られる。望月博士は「一闍提」の発言・行動とみる（前掲書 p. 426）。『泥洹経』は、「似一闍提阿羅漢」=「似一闍提摩訶薩」（一闍提に見える阿羅漢・摩訶薩）の発言・行動としており、『大般涅槃経』は「悪人」の発言・行動としている。他方、下田博士は菩薩の発言・行動と見る（『涅槃経の研究』, pp. 372-373）。
- (43) *aṅga*には“attribute, quality, characteristic”の意味がある（BHSD, s.v. *aṅga*）。
- (44) *'dod chen pa zhes grags pa ni dge ba med pa'i sems can nga rgyal gyi dbang du gyur pa yin te / 'dod chen pa de la mi 'ong ngo // gzhi'i yan lag ci zhe na / mdo sde spong ba'o //*（『影印北京版西藏大藏経』, vol. 31, No. 788, p. 199, 133a6-7）。 Cf. 望月前掲書, pp. 419-421. この部分、梵語断簡がある：+++ *lam satva icchantikā iti .i ++++++* ++ *kiṃ mūlāṅgam sūtrapratiṣepah*（松田和信著『インド省図書館所蔵中央アジア出土大乘涅槃経梵文断簡集——スタイン・ヘルンレ・コレクション——』東京：東洋文庫 1988 [Studia Tibetica, No.14], p. 45）。
- (45) 上に出た「幼稚で愚かな阿蘭若住者にして経の誹謗者が、（自ら）<sup>4</sup>阿羅漢であると主張するならば、彼は阿羅漢に似ているし、摩訶薩にも似ている」。六卷本『泥洹経』「若阿練若愚癡無智。状似阿羅漢。而誹謗方等。愚駭凡夫謂真阿羅漢。謂是大士」（大正12巻, No. 376, 892c20f.）、四十巻本『大般涅槃経』「有一闍提作羅漢像。住於空處。誹謗方等大乗經典。諸凡夫人見已。皆謂：“真阿羅漢。是大菩薩摩訶薩。”」（大正12巻, No. 374, 419a19f.）も参照。
- (46) 六巻本『泥洹経』「諸佛世尊皆當無常。而説：“常住”。當知是爲毀滅正法破僧之相」（大正12巻, No. 376, 892c26）、四十巻本『大般涅槃経』「亦説：“如來是無常法。毀滅正法。破壞衆僧。”」（大正12巻, No. 374, 419a24f.）。
- (47) 『出三蔵記集』（大正第55巻, No.2145）は大乗『涅槃経』漢訳の梵語原本が在家信者の家にあつたと伝えている。すなわち法顯はパータリプトラの優婆塞、伽羅先から得た（60b3f.）。また曇無讖訳の原本は、智猛が、伽羅先の子孫の婆羅門、羅闍から得たという（113c4f.; 60b14f.はその抜粋）。この記述は、この經典が、少なくともある時点までは、出家教団に認容されなかつたことを示唆している。下田『藏文和訳「大乘涅槃経」』, pp. xxv-xxvi, 同『涅槃経の研究』, pp. 157-158.を参照。なお下田博士は、当該箇所を誤読している。甚だしいのは、「華氏」（パータリプトラの訳語）をヴァイシャーリーのカーシー（!）と理解していることである。
- (48) *icchā*（「主張」）+ *anta*（この語自身意味がない。Cf. Margaret Cone, *A Dictionary of Pāli*, s.v. *anta*）> *\*icchānta*（「主張」）に接尾辞 *-ika*がついて *\*icchāntika* > *icchantika*（「主張する者」）となつたか。注32参照。
- (49) 上に引いた大乗『涅槃経』の「（自ら）阿羅漢であると主張する盲目で孤独の一

闍提は、無限の道を歩もうと願っている。慈心を備えた阿羅漢であると主張して、方広を誹謗しようと願う」(‘*dod chen pa long ba gcig bu dgra bcom pa yin par ‘dod pa ni lam mi zad pa chen por ‘gro ‘dod do // byams pa dang ldan pa’i dgra bcom pa yin par ‘dod la shin du (v.l. tu) rgyas pa sun dbyung bar ‘dod de /*) という表現は、この二つの意味を使った言葉遊びの可能性がある。

(50) 阿羅漢は誰でもが勝手になれる訳ではなく、極めて希有な存在であったと思われる。例えば、『法顕伝』(大正51巻, No. 2085) のスリランカに関する部分に、「Mahāvihāraに(かつて)高德の沙門がいて、国中の人々が、彼は阿羅漢ではないかと思った。その臨終の際、王は彼を見舞いに訪れた。王が、法に則り、僧達を集めて“この比丘は覺りを得たのではないか”と尋ねると、皆は阿羅漢であると答えた。彼が亡くなると、王は経律に基づき阿羅漢に対する葬儀を行わせた。……………私法顕がその地に着いたときは、すでに亡くなっていた。ただその葬儀を見ただけだ(唯見葬)」という記述がある(865b13f.)。長くインド・スリランカに滞在し当時の仏教の実態を知っていた法顕が、わざわざこの様に記述するほど阿羅漢は希有の存在だったのである。なお、Deeg博士は、「唯見葬」を「ただその墓を見ただけだ」と解釈し、この阿羅漢の葬儀は法顕の時代のことではなく、アショーカーの息子でスリランカに伝道に行ったMahindaの葬儀のこと(cf. *Dīpavaṃsa* 17.93ff., *Mahāvāṃsa* 20.30ff.)と推定している。Max Deeg, *Das Gaoseng-Faxian-Zhuan als religionsgeschichtliche Quelle: Der älteste Bericht eines chinesischen buddhistischen Pilgermönchs über seine Reise nach Indien mit Übersetzung des Textes*, Wiesbaden 2005: Harrassowitz (Studies in Oriental Religions 52), pp. 167-171.

(51) 下田博士によれば、現『涅槃経』は三層に分かれるという。すなわち第一類と第二類に分かれ、後者がさらに二つに分類されるという(『涅槃経の研究』pp. 160f.)。

(52) 下田博士によれば、「一闍提」の語は第一類には現れず(序品に見える一例は後からの挿入か)、第二類になって五十箇所以上現れるという(『涅槃経の研究』pp. 363f.)。

(53) *The Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantrasāstra*, ed. by E. H. Johnston, Patna 1950: Bihar Research Society.

(54) 『楞伽経』の次の文も、*icchatika*が“(輪廻を)欲する者たち”の意味で理解されていたことを示している様だ。「そこで次に、マハーマティ! 一闍提(*icchantika*)にどうして解脱への願望がない(*anicchantikatā*)のかというと、それは、一切の善根を捨てることと衆生に対する無始来の誓願に由る。そのうち“一切の善根を捨てること”とは何かと言え、菩薩蔵の拒絶・誹謗である。“これらは経・律・論に合致しない”と言って一切の善根を捨てることによって、涅槃に入らないのだ。



……」 (*Lankāvatāra Sūtra*, ed. B. Nanjio, Kyoto 1923, p. 65, l. 17f. *tatrēcchantikānām pun-ar Mahāmate anicchantikatā mokṣam kena pravartate? yaduta sarvakuśalamūlōtsargataś ca sattvānādikālapranidhānataś ca. tatra sarvakuśalamūlōtsargaḥ katamo? yaduta bodhisattv-apīṭakanikṣepo 'bhyākhyānaṃ [←°nām] ca nāite sūtrānta-vinaya-mokṣānukūlā iti bruvataḥ sarvakuśalamūlōtsargatvān na nirvāyati.*)

(55) Cf. 高崎直道『宝性論』講談社1989 (インド古典叢書), p. 51.

(56) *ibid.*, p. 51.

(57) *ibid.*, p. 55.

(58) *icchantika*に対する '*doḍ chen pa* (欲の大きな者) や *log sred can* (邪な欲を持つ者; cf. Ruegg, *ibid.* [注32], p. 12, n. 1.) というチベット語訳も、“(輪廻を) 欲する者たち” という新しい解釈に基づく。

〈キーワード〉 *icchantika*, 如来藏思想, 大乘涅槃經